



図書館だより

2020.11
No. 34

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123
TEL 0956-47-2191 (代表)
<http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

海外歴史ドラマから 得られるもの

古河 幹夫
(副学長)

年齢のためか夕食後に仕事の時間をとることが辛くなってこの何年間、海外の歴史ドラマを妻と一緒に楽しんでいる。その一つに「オスマン帝国外伝」がある。元女奴隷のヒュッレムが後宮で皇帝スレイマンの寵愛を勝ち得て皇后の座を射止め、陰謀と策略を潜り抜けて支配力を及ぼしていくストーリーで、ヒュッレムを主人公にした少女漫画もあるようだ。元来は中央アジアにいたトルコ系部族が現在のトルコ半島に招き入れられて建国、コンスタンチノーブルを陥落、隆盛期には中欧のウィーンをも包囲攻略しヨーロッパを脅かしたオスマン帝国。乏しい知識とイメージしかなかったが、そういえば Folio から購入した本でオスマン帝国のものがあったな、と書架から Lord Kinross, *The Ottoman Empire* (The Folio Society, 2003) を取り出してスレイマンの時代を読んでみる。また専門家のなかで評価の高い『イスラームの国家・社会・法』(H・ガーバー著、藤原書店、1996年) も開いてみる。

征服した地域からキリスト教徒の少年を徴用して形成したイエニチェリ(常備歩兵軍団)が強力な軍事力の中核であったこと、イスラム教を基礎にしながらヨーロッパと比べて遜色ない「法の支配」がみられたこと等はじめて知る次第であった。市場での商人と客のやり取りや寄進施設建設のようにドラマの本筋でない傍系的描写もイメージを豊かにさせてくれる。もちろんドラマであるからフィクションではあるが。

ここまでだけの話なら、退職を控えた老教師の楽しみを披露するだけだろう。頭抜けた読書家である出口治明氏(立命館アジア太平洋大学学長)が、退職高齢者に「読書、旅、人との出会い・会話」を勧めておられるが、それにドラマ視聴を追加するようなものである。忙しくて時間がない現役世代には「結構なことですね」と内心で揶揄されるのがオチかもしれない。

世界事情や世界史を描いたドラマを観る効用を指摘したいと思う。若い時に大著あるいは俯瞰的に考察している書物に挑戦していただきたい。だが、そのような書物ほど、比較対象に取り上げる事例や文化・文明が多岐にわたるものである。フランシス・フクヤマという学者がいる。彼の『Trust (邦訳:「信」無くば立たず)』(三笠書房、1996年)は外書購読の授業で何度かテキストに使用したが、それ以来彼の仕事に注目している。近著の『政治の起源』(講談社、2013年)と『政治の衰退』(講談社、2018年)は実に読み応えのある書物である。始皇帝による秦の政治体制をもって「近代政治体制」の走りと捉え、オスマン帝国、ビザンツ帝国、現代のアフリカ諸国、アジアや南米の政治体制など、まさに俯瞰的に考察し、欧米を本流とすると理解されてきた近代民主主義制度を問い直している。

大きなテーマを扱い俯瞰的に考察論述している書籍は、読む側の知識が一定程度ないと歯が立たないことが多々ある。分厚い本も多く、途中で読むのを諦めることもあるだろう。だが、むしろ「分らない」というひっかかりを持ち続けてほしいと思う。私たちが生きているこの世界、一人一人の人生で重大なことはそう簡単に答えが見つからないものだ。小さな成功体験を積み重ねることも大切だが、生

涯におよぶ大きな山を目指すことも大切である。どこまで登れるかわからないにしても日々体力を鍛えなければならない。

ヨーロッパには退職後訪れるのを楽しみにしていたところが沢山ある。現在のコロナ禍で制限されている海外旅行が元に戻ったとし

ても、何時間にもおよぶ飛行機での移動は身体にこたえる。このあと、何回ほど欧州旅行に行けるのだろうか？ 私にとって、世界史を扱ったドラマの視聴は楽しみながら知識を広げ、高い山をめざす鍛錬でもある。

書を「持って」、町に出よう

石 田 和 彦

(附属図書館長)

附属図書館長を拝命して、もう 5 年目になります。館長は、この年 2 回の『図書館だより』に何かしら寄稿することが慣例になっていますが、毎回書いてくると、さすがにそろそろ「ネタ切れ」になってきたというのが、偽らざるところです。

館長になって以来、どうしたら学生の皆さんにもっと図書館を利用してもらえるか、いろいろと考えて来ました。この『図書館だより』も、図書館の広報誌ですから、読んだ皆さんが図書館を利用したくなるようなことを書くのが本筋なのでしょうが、「ネタ切れ」の今回は、そこからは少し外れて、「本を読む」ということ自体について、自分の経験を交えて取り留めのないことを書いてみようと思います。

ここで白状してしまいますと、実は、私自身は、「図書館で本を読む」ということが苦手です。はるか 40 年以上も昔の話になりますが、自分の学生時代も、調べ物で図書館を利用することはあっても、図書館で本を読んだことはほとんどありませんでした。集中して学問に関する調べ物などができる場所であるために、図書館は静かでなければなりません。多くの図書館が、館内の閲覧スペースでの私語・会話や PC 利用（キーボードの音がする）を制限しているのは、そのためです。しかし、リラックスして、楽しみながら本を読むためには、私には、図書館は「静かすぎる」のです。この辺は人によって違うのだと思いますが、

私は、周りに適度にノイズがあった方が、かえって本に入り込むことができるので、図書館のような極限的に静かなところでは、どうも読書がはかどらないようです。

では、これまでの長い人生、どこで本を読んできたかという、その大半は、移動の車内・機内と、「町の中」ということになります。まず、日常的には、日々の通勤（学生時代は、通学）の車中です。本学に着任する前は、都市部に住んでいましたので、大抵、通勤・通学時間は片道で 1 時間を超えていました。往復で日に 2 時間以上ですから、新書版の本くらいなら、1～2 日で 1 冊読んでしまいます。これが週に 5 日あると、結構な読書時間になります。実は、学生時代は、大学では計算機室に入り浸っていたため、専門の経済学や統計学の教科書や専門書の多くも、通学の車内で読んでいました。社会人になってからは、ますます、自由に使える時間は減りますので、通勤の車内は貴重な読書時間でした。大学の教員になって研究室を持ってからも、専門の研究に関係のない本は通勤の車内で読む習慣は変わっていません。本学に来てからは、通勤時間が半分以下になりましたが、それでも、30 分弱の MR の車内は、私にとって貴重な読書時間です。

そして、仕事での出張も含めて、旅に出る時は、必ず何冊かの本を持っていきます。移動の車内や機内は、結構な長時間になりますので、まとまった読書時間をとる絶好のチャンスです。こういう時は、まず、「今回はどの本を持っていこうか」と考えることから、楽しみが始まっています。旅の荷物にそんなにたくさんの本を詰め込むわけにはいかないので、何を読もうか、ひとしきり考えて、持っ

ていく本を数冊選ばなければなりません、そのプロセス自体も楽しみの一部です。旅の行先や、移動手段にあわせて、持っていく本を選ぶなどというのは、その「選ぶ」楽しさを倍増させてくれます。

かつて、日本中を夜行列車が走り回っていたころは、「時刻表トリック」のアリバイ崩しの推理小説を選んで、それを抱えて夜行列車に乗り込むのは、推理小説好きの私にとっては、最高の贅沢でした。ちなみに、「時刻表トリック」というのは、犯人が、「犯行時刻には自分は〇〇という列車に乗っていました」(乗車時間の長い、夜行の場合が多い)とか、「犯行現場からはるか離れた場所にいて、犯行時刻までには現場にたどり着けません」とアリバイを主張し、探偵役が分厚い「時刻表」を駆使してそのアリバイを破るという、推理小説の一分野です。鮎川哲也氏や津村秀介氏と言った名手や、トラベルミステリーで一世を風靡した西村京太郎氏など、多くの作家がこの分野で活躍していたのですが、出発地と目的地、出発／到着時刻を入力すれば瞬時にあらゆる可能なルートを検索してくれる時刻表アプリのおかげで、ほぼ絶滅してしまいました。夜行列車も、もうほとんど走っていません。残念至極です。

いまはスマホ等で電子書籍を読む時代ですから、「どの本を持っていくかなどと悩む必要はない」、というのも、その通りなのですが、読書の楽しみは、悩みながら「本を選ぶ」ところから始まっているので、是非、学生のみなさんにも、紙の本で、こうした「選ぶ」楽しみを経験して頂ければと思います。

もう一つの本を読む場所が「町の中」ですが、

町の中と言っても、座ってゆっくり本を読める場所は、大抵、カフェ(昔は、喫茶店と言いました)になります。町中のカフェの、できれば窓際の表の街路が見渡せる席に座って、歩いている人たちなどをぼーっと視界の片隅に入れながら、好きな本を読む、思い切りリラックスできる時間です。カフェですから、当然ながら、周りには話している人がたくさんいますし、町自体の騒音もありますから、決して図書館のような静寂ではありません。ところが、しばらく本を読んでいると、脳が集中モードに入り、周囲のノイズがBGMのようになって、驚くほど本に入り込むことができるのが、不思議です。あまり長時間になると、お店に迷惑をかけかねないので、そういう時は、コーヒーをもう一杯、至福の時間と言うべきでしょう。残念ながら、本学の近くには、カフェと呼べるようなものはありませんが、佐世保の町中や、様々な用事で大きな町に行ったときなどに、ぜひ、皆さんも試してみてはいかがでしょうか。

出かける時には、必ず、バッグやスーツケースの中に、本を選んで入れていく。そうして、移動の車中・機中や、出かけた先の町中のカフェなどでそれを読む。私自身がずっと持っているそんな楽しみを、この機会に多くの学生の皆さんが知るようにになれば、本をたくさん読むようになる、そうすれば、自然と図書館の利用も増えるだろう、というのが、図書館長という今の立場での私の目論見でもあります。もちろん、町に持っていく本は、図書館で借り出してください。ただし、出先での本の紛失には十分に注意して頂くよう、館長として強くお願いしておきます(笑)。

寿司サイエンスと ハンバーガーサイエンス

坂 根 純 輝

(経営学科准教授)

大学における図書館の役割の一つに、研究に関連する学術書、論文及び資料などを学生に提供することがあげられます。皆様は卒業論文を執筆する際に、図書館を利用して卒業論文に関連する論文を探すことになるでしょう。皆様は日本人が執筆した論文だけを参考

にするかもしれませんが、もし余裕があれば、国際ジャーナルに掲載されている欧米の学者等が執筆した論文も参考にするをおすすめします。なぜならば、欧米の学者等が執筆した論文と日本人が執筆した論文には文化的な背景の違いから異なる論文スタイルになっている場合があるからです。そして、論文、すなわち科学論文はそもそも西洋からもたらされたものです。つまり、論文を書くことは、西洋の土俵で相撲をとるという事に他ならないので、西洋の土俵を理解する必要があります。日本の科学論文と欧米の科学論文の傾向の違いを本川教授（東京工業大学名誉教授）は、寿司サイエンスとハンバーガーサイエンスという用語で表現しています（Tatsuo Motokawa, 1989, Sushi Science and Hamburger Science. Perspectives in Biology and Medicine, Volume 32, Number 4, 489-504.）。以下、本川教授の考えを述べます。

寿司は、魚を切ってご飯の上に重ねただけの料理です。もちろん、魚の新鮮さと寿司職人の技術によってその味は大きく変わりますが、日本の寿司職人は、謙虚に、その技術を主張せず、材料に語らせるというスタンスをとっています。一方、西洋料理の代表格のハンバーガー及びフランス料理は様々な具を積み上げ、こてこてに調理することによって素材の味を大きく変えます。つまり、西洋の料理は材料ではなく料理人のスキルが重視される傾向があるのです。何の話をしているのだと思われるかもしれませんが、寿司とハンバーガーの文化の違いが論文にあらわれている場合があるのです。

日本の科学論文（寿司サイエンス）は、結果重視で、説得力の高いデータ（材料）を掲載し、データに語らせ、考察や検討を研究結果ほど重視しない傾向があります。寿司サイエンスは、精度の高い結果を出すことに重点を置き、結果に語らせようするため、大きな仮説を打ち出そうとしないことが多く、普遍的な理論を出しづらいという特徴があります。

一方、西洋の科学論文（ハンバーガーサイエンス）は結果以上に、考察や検討（スキル）を重視します。西洋の科学論文では、事実の蓄積が我々をどこにも導いていないという考えから、事実は単なる事実として扱われ、その事実から得られる理論を重視する傾向があるのです。ハンバーガーサイエンスでは、とても小さな結果から、大きな仮説を創設することもあり、普遍的な理論を打ち出すこともあります。もちろん、結果を軽視しすぎて空想に陥る可能性はありますが、新しくて斬新な方向に科学を推し進めることもあります。

寿司サイエンスもハンバーガーサイエンスも一長一短があるので、どちらのスタンスで論文を執筆するかは学生の自由ですが、西洋の土俵を理解するために、欧米の科学論文を1本手にとってみてはいかがでしょうか。国際ジャーナルに掲載された論文は長崎県立大学の図書館マイページの EBSCOhost から閲覧可能です。

美味しいお寿司と佐世保バーガーに溢れる長崎に設立された本学の学生が寿司サイエンスとハンバーガーサイエンスの長所を融合させた卒業論文を提出することを期待します。

元気をくれる本

黒 岩 美 翔

（国際経営学科講師）

今年は新型コロナウイルスの影響で、例年とは大きく異なる事態となり、大学でも様々

な面で変化が求められることとなりました。新入生の方は入学早々、大学に来ることができない日々が続き、ただでさえ慣れていない大学生活に、不安な毎日を過ごしていたことと思います。一部対面授業が再開されましたが、コロナウイルス感染拡大防止のため、まわりと間隔を空けたり、マスクを着用した上

で講義を受講しなければならず、まだまだ気の抜けない状況に多くの方が疲れを感じていることかと存じます。そんな方々へ向けて、今回は西加奈子さん著書の「きりこについて」（角川書店、2009年）を紹介しようと思います。時間はあるけど外に出るのが億劫なときに、ぜひ読んでもらいたい一冊です。読むと思わず笑いがでて、元気がもらえる、そんな小説です。

「きりこは、ぶすである。」これがこの小説の第一節です。そう、この小説の主人公は、タイトルにもなっている「きりこ」という少女で、単刀直入に「ぶす」という設定です。しかしながら、両親（そこそこの美男美女）がきりこを「可愛いなあ、可愛いなあ」と言って育てたため、きりこは自分のことぶすだとは全く思っていません。また、両親以外のまわりの大人たちはきりこの容姿に同情し、気をつかって何とか容姿以外の部分で褒め言葉をかけていたため、きりこ自身は世界中から愛されているとさえ思っています。さらに、まわりのこどもたちもきりこの自信に満ちた可愛い然とした態度に圧倒され、加えてこどもたちの判断能力がまだ不十分である（本書では、こどもは「11歳まで酔っ払い」と同様の判断能力しかないとされている）ことから、きりこに洗脳されている状態です。

ところが、成長するにつれて、まわりもきりこがぶすだということに気づき始めます。そうして11歳を過ぎると、それまでみんなのリーダー的存在だったきりこは、その容姿や態度からいじめにあうようになり、引きこもりになってしまいます。そのため、高校にも大学にも行かずにはほとんどの時間を寝て過ごすことになるのですが、疎遠になっていた幼馴染「ちせちゃん」との再会をきっかけに、きりこは自分の「容姿」も「中身」も受け入れて、前を向いて生きていくという話です。内容を大部端折って紹介しましたが、斬新な表現や文体、個性的で強烈な登場人物、この小説のキーパーソンならぬキーキャッ

ト？となるラムセス2世（きりこが飼っている猫）が魅力的で、声を出して笑わずにはいられませんので、ぜひ読んで確認してみてください。

「きりこについて」を読んでいて感じるのは、人が自分のことをどのように判断しようとも、結局は自分がどう考えるか、いかに自己肯定感を高く持っていられるかが一番大事なことです。今回この小説を紹介したのは、読むと元気になれることはもちろんのこと、最近、色んな人と話していて、自己肯定感が低いことに悩んでいる人が結構多いなど感じるがあったからです。

結局は自分が自分自身を肯定してあげなければ、誰から何を言われても意味がありません。もちろん、人にどう思われているのか気になったり、できれば嫌われたいと考えながら生きている人も多いかと思います。しかし、自分の幸せは自分の気持ち次第で変わるように、最終的に自分がどう感じるかが一番大事だと思います。特に今のように予期しない事態が起こり、日常的にストレスにさらされるような状況においては、自分のことが嫌になる日もたくさんあるかもしれませんが、そんなこともあるよね、くらいの気持ちでいることが生きていく上で非常に大切ではないかと思います。何かミスを犯してしまったときに、何が悪かったのか原因を考えて反省することはもちろん大切ですが、自分を責めすぎてしまったのは負の連鎖に陥りかねません。

せつかくの一度きりの人生ですので、何か嫌なことがあったとしても、どうせ限られた命だから、もっと好きに生きようと思って人生を歩んでももらえたらと思います。そのためにも自分自身を受け入れることが生きていく上でどれだけ重要か、きりこがそれを教えてくれます。

因みに、西さんの小説は「きりこについて」以外の作品も非常にユーモアに富んでおり、読んでいて笑いが止まらない一方で、ほ

ろりと自然に涙が流れるような話もあり、心揺さぶられます。少し気分転換したいとき

に、ぜひこの小説を手にとって、元気を出してもらえればと思います。

Withコロナ時代の読書会

石 田 聖

(公共政策学科講師)

新型コロナ感染拡大の影響で、私たちの生活や仕事から“集う”ことが少なくなりました。

最近、コロナで外出自粛の一方で増えたのが読書と読書会です。読書会は、指定された図書（主に古典や名著と呼ばれるもの）を読んで集まる会で、私自身が教員になる以前、学生時代から主催しています。これまでも多くの学生、同僚の先生、社会人の方々と一緒に、プラトン『国家』、アリストテレス『ニコマコス倫理学』に始まり、比較的時代が新しいところでは、宮本常一『忘れられた日本人』、マイケル・サンデル『これから「正義」の話をしよう』などの本を取り扱ってきました。

コロナ自粛で、読書会に新たに加わった要素が「オンライン」。遠隔会議ツールを用いて、読み進めていてわからなかった部分は、本と関連する論文、画像・動画なども画面共有したり、時には、タブレットの電子書籍で関連本を検索して理解を深めたり、オンライン環境での新たな探求のあり方も模索しています。

学生らも本や著者の名前は知っていても、じっくり読んだことがない古典を中心に、一人では読み進めにくいものを、皆で読んで議論を深めていきます。有志の学生、他学科の先生と一緒に開催している読書会には正解はありません。気負わずに自分の感じたこと、本の中で語られていることと現代とのつながりなど、各自面白いと思った気づきを共有していきます。コロナ感染拡大以降は学生の希望もあって、人口問題の古典であるマルサス『人口論』を週1回程度3か月間にわたって読

み深めていきました。当然ですが、読書会に集まる学生と私では世代も違い、ご一緒する先生も異なる専門分野。一方で、自分とは離れた世代、異なる生き方をしてきた参加者から受ける刺激は楽しく、勉強になります。

読書会では、時に本筋から離れた“脱線”も楽しみの一つ。『人口論』では、人口増加に不可欠な食糧生産の手段である農業の重要性が語られていますが、IoTに関心の高い若い学生と議論していくうちに、「スマートシティ」「スマート農業」などの話題にも広がり、「じゃ、次回はスマートシティの本や論文も読んでみよう」と古典から一気に現代の話題に飛躍。参加学生の一人は、首都圏の大学生らとオンライン読書会を独自にスタートさせるなど、新たな学び、発見にもつながっています。

現在、一緒に読書会を盛り上げてくれている地域創造学部実践経済学科2年生の下岡君は、「古典は、数百年、千年以上という長い年月を経ても、いまだに読み継がれている。多くの抽象的な表現を自分の言葉で噛み砕いて理解していくことはなかなか骨だが、参加者の助けを借りながら読み進められるのも大きな利点」、同学部学科3年生の畑岡君は「講義科目や専門領域を超えた議論により、回を重ねていくごとに面白さを増しています」。そして、読書会をご一緒している同僚の芳賀先生は「読書会は、率直で忌憚のない議論が学生、教員と一緒にできるサロン。知的好奇心と新たな発見が得られ、毎回、学生たちから大いに刺激を受けています」と話してくれました。

他の人の話を聞いていると自分の中から新たな発見が生まれてくることもあります。これまで上手く言語化できておらず、なんとなく引っかかっていったものが、参加者同士の議論の中で活きた言葉を獲得していく瞬間が

読書会の醍醐味。今年度最初はオンライン中心でしたが、最近では、対面での読書会も少しずつですが再開しています。

新型コロナの感染拡大以降、私たちの生活や仕事から“集まって語らう”場が少なくなっています。しかし、オンライン下でも読書会を通じた共通の話題で集まることで、新しい出会い、自分と他人との考え方の違い、名著から学べる現代社会への示唆、人間を考えるきっかけになると考えています。予測がしにくいコロナの時代。過去を振り返るため。未来を見通すため。自らの知見を広め探求を深めるため。新しい生活様式も求められていますが、この生活様式に新しいスパイスが欲



これまで取り上げた本

しい方、皆さんも（オンライン）読書会などいかがでしょうか？

◆本文中に登場した書籍

アリストテレス著／高田三郎訳『ニコマコス倫理学（上）』岩波文庫、1973年

トマス・ロバート・マルサス著／永井義雄訳『人口論』中央公論社、2017年

プラトン著／藤原令夫訳『国家（上）（下）』岩波文庫、1979年

マイケル・サンデル著／鬼澤忍訳『これからの「正義」の話をしよう—いまを生き延びるための哲学』早川書房、2011年

宮本常一著『忘れられた日本人』岩波書店、1984年



読書会の様子

“ウィズ・格差”の時代を読み解く書籍

壁 谷 順 之

（実践経済学科准教授）

2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響から始まり、私たちの日常生活にも様々な影響を及ぼすこととなった。私たち教職員や学生の皆さんなどの大学関係者は、まずは遠隔授業導入というこれまでの既成概念を打ち破る新たな対策に試行錯誤の連続であったと思う。

そんな状況の中で、図書館の閉鎖や時間短縮といった制限が徐々に回復しつつあり、図書館を利用する人たちも足を運ぶ機会が増え

つつあると思われる。秋は読書の時期でもあり、何か本を読もうかなと気分が乗ってくるかも知れない。私は普段それほど多くの書物を手に取るタイプではないが、経済学分野に携わる者の一人として何かオススメできる物を考えてみた。真っ先に思いついたのが、比較的読みやすいジャンルの専門書であり、とりわけ「経済と格差」に関連する書籍をいくつか取り上げてみたい。現在は“ウィズ・コロナ”と呼ばれるように、今後いつまで続くのか予測がつかない状況にある。それと似た表現ではあるが、今の時代を別の表現で例えるなら“ウィズ・格差”と言えるかも知れない。なぜなら、私たちの身の回りには様々な格差が存在している・・・給料格差、学歴格差、男女格差、地域間格差など。私たちは格

差と聞くと、思わず良くないものと決めつけてしまいがちであるが、反面、格差を完全に解消することも不可能であると重々承知しているのである。

こうした様々な格差のうち、経済格差を長年に渡って研究し続けている有名な学者がいる。元京都大学教授・橋本俊詔（たちばなぎとしあき）氏である。私たち経済学分野の研究者の間では知らない人はいないほど著名な学者であり、恐らく日本人でノーベル経済学賞の受賞を予想するなら、間違いなく上位に期待されるほどの有力な候補者の一人であろう。同氏の書かれた論文・書籍は膨大な量であり、その中でも私が紹介したい書籍をいくつか取り上げていく。

1冊目は『教育と格差』（共著、日本評論社、2009年）である。社会において、学歴や教育の質（公立・私立など）といった生い立ちが、所得や昇進などの側面にどのような影響を及ぼしているのかを比較的理解しやすい観点でまとめている。内容は同氏の科研費データに基づく実証分析が中心であるが、難解な数式や表現を最小限に抑えてグラフや図表を多く用いており読みやすくなっている。

2冊目は『女子の選択』（東洋経済新報社、2020年）である。同氏は、専門分野の労働経済学や社会保障論の多面的な角度から切り込んで分析している。内容は、女性が活躍する社会で、労働と幸福感（満足度）の関係や個々の大学別に見た女性同士の特徴など、こちらも比較的読みやすい展開となっている。また、同氏は以前にも『女女格差』（同出版社、2008年）を刊行しており、ユニークな書籍タイトルからも想像できるように従来の男

女格差とは異なる同性格差に焦点を当てた一例である。

3冊目は『日本の経済学史』（法律文化社、2019年）である。上述のとおり日本ではまだノーベル経済学賞の受賞がなく、なぜなのかという疑問からスタートしてこれまでの日本人と経済学の関わりを時代ごとに簡潔にまとめている。これまでの2冊とは異なり、世界と日本の相違点や格差が内容の端々に感じられ、やはり現代格差を読み解く一冊といえよう。

以上、ここで紹介した書籍はほんの一例に過ぎないが、私がこの原稿を思い立った理由として、実は私は個人的に同氏とかつて短期間だけ関わった経験があったからである。私が10年前に母校・同志社大学でのポストドク時代に、同氏が京都大学を退官し同志社に移ってきた。当時、私の所属する研究機関の所長に同氏が兼任され、私は一介の研究員に過ぎない立場であり、恥ずかしながら数える程度の機会だけ接することができた。今、同氏は京都女子大学に移られ、年間約10冊前後のペースで著書を出版するなど、今なお格差社会に正面から立ち向う姿を、遠く長崎・佐世保の地より垣間見るところである。



◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）
土曜日：午前9時～午後5時まで 休館日：日曜日・祝日・大学閉校日など

現在、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学外者の利用は控えさせていただくなど利用制限を行っています。

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会 発行日／2020年11月27日